

「世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ」の問いかけに

中井 弘一

『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』という絵本が通販の書籍部門でよく売られている。2012年ブラジルのリオデジャネイロで、環境が悪化した地球の未来について話し合う国際会議(国連持続可能な開発会議[リオ+20])が行われた。これといった名案もなく、型どおりのスピーチが行われていった中で、最後に当時ウルグアイの第40代大統領であったホセ・ムヒカ(José Mujica)氏が質素な背広にネクタイなしのシャツ姿の出で立ちで登壇しスピーチを行った。最後の演説という順番のせいか聴衆が少なくなった会場で、その演説は終わると同時に大きな拍手を巻き起こした。その演説を日本語訳にしたものの一つが冒頭の絵本である。インターネットのサイトでこの演説の英語訳を見つけ英文演説を読んだ。演説の問いかけに心動かされた。前大統領のように問いかける姿勢・意識について考えた。

I ask this question: what would happen to this planet if the people of India had the same number of cars per family as the Germans? How much oxygen would there be left for us to breathe? More clearly: Does the world today have the material elements to enable 7 or 8 billion people to enjoy the same level of consumption and squandering as the most affluent Western societies? Will that ever be possible? Or will we have to start a different type of discussion one day? Because we have created this civilization in which we live: the progeny of the market, of the competition, which has begotten prodigious and explosive material progress. But the market economy has created market societies. And it has given us this globalization, which means being aware of the whole planet.

Are we ruling over globalization or is globalization ruling over us? Is it possible to speak of solidarity and of “being all together” in an economy based on ruthless competition? How far does our fraternity go?

演説の一部にこのような問いかけがある。「インドの各家庭が、ドイツの家庭と同じだけ車を持つようになったら、この星はどうなるでしょうか。息をするための酸素がどれだけ残されるでしょうか。」「今日の世界に、70億、80億の人々が西洋の裕福な社会

と同じくらい消費・浪費をするだけの原材料があるのでしょうか」「私たちは、グローバル化を支配できているのでしょうか、それとも、グローバル化が我々を支配しているのでしょうか」

分かりやすい言葉でまっすぐ心に突き刺さる問いかけである。こうした考えを意識していなかった自分に問い直さなければならないという気持ちが生まれる。環境問題だけでなく、グローバル化の波に流されていると思われる昨今の政治・政策をしっかりと見つめ直さないといけないのではないだろうか。英語教育では、グローバル化に対応するためコミュニケーション能力の育成が最重要課題とされている。コミュニケーション能力の育成はもちろん大切なことである。しかしながら、それだけで良いのだろうか、それしかないものであろうか。

先日、知人の新進気鋭で教育熱心な英語の先生が Facebook で英語を教える意味についてこう呟いていた。

These days I often wonder why I teach English. In the school where I work, students work on debate, discussion, and speech in English. I'm sure their English ability has improved a lot since they entered. In fact, some students in my homeroom class advanced to the nationwide English speech contest. The reason why I help them join speech contest is to improve their skill: by practicing for and joining the speech contest, they can develop not only their language skill like writing and speaking, but the way to speak in front of people efficiently and confidently. This is actually necessary after you start working in a company.

However, what comes after teaching practical English? I teach practical English and its aim is to have students acquire language skill, but these days I feel the students are less motivated because we can't show the clear goal after teaching language. They are becoming able to speak English better and they practice speaking English even with Japanese students, but they hesitate to communicate with foreign people. Why do they study English then? I feel like, we focus on the education of practical English too much and less on growing global mind but I guess these two shouldn't be divided. What do you think about this point, guys?

“Why? So what?”などと問いかけるのは、物事の本質を考えるようとする姿勢の現れである。英語科教員は、学校教育の中で英語教育に従事している。「教育」を担っているのである。決して英会話学校の教員ではない。英語のスキルを身に付けさせるだけでなく、その途中、その先にある英語「教育」の目的を語り、それぞれの生徒に学ぶ意味と喜びを持たせ、将来、社会の構成員として生きる教養・知恵をはぐくみ人間形成の育成に努めなければならない。教える側にそのための明確な教育目的がないと、教員にとっても生徒にとっても学びに見通しが立たないばかりか、学ぶことの意味や価値を見いだせなくなる。グローバル化だから英語のスキルが必要というのではなく、グロー

バル化とは何か、そこにある考え方はどのようにして生まれているのか、ぶつかり合う文化はどうあるべきか、その根源を、英語という言語教育に携わる者こそが伝えるべきではないか。英語科教員は、直接、対象言語を学ぶことを通して、英語そのものが文化である言語文化を扱い、英語社会において物心両面にわたる活動の様式と内容の総体となっている、ものの見方や価値観を生徒に習得させることもミッションとしている。外国でエレベーターに乗っているとき、知らない人から声をかけられるのはなぜか、“Why? --- Because …”と主張を大切にするのはなぜか、など英語国民に流れる根底の意識を英語という言語を通して考えさせる。その上で、スキルを身に付けさせることが望まれるのではないだろうか。これからの時代は、正解が一つの事だけを学ぶのではなく、正解が複数であったり、または正解がなかったりするものを学習していかねばならない。そうであるからこそ、英語という教養を身に付けさせてやりたい。どうすることが大切なのかという思考・判断はそうした基盤がないとできない。

教育は生徒の幸せの基盤であるべきだ。急激に変化する社会の中で物事の価値観も大いに変化している。そういう時こそ、それで良いのだろうか、何が本質であろうかと問いかける姿勢が大切である。教員は生徒の幸せを願って教育を行うのであるから。ムジカ前大統領は、演説の締めくくりを次のように結んでいる。

“Development cannot go against happiness. It has to work in favor of human happiness, of love on Earth, human relationships, caring for children, having friends, having our basic needs covered. Precisely because this is the most precious treasure we have: happiness.”

■参考文献

Human happiness and the environment Address by Uruguayan president Jose Mujica
Translated by Global Alliance, from: <http://d.hatena.ne.jp/shiro-kurage/20130224/p2>

(なかい・ひろかず 教授／教員養成センター長)
